

# Newsletter

No. 12 December 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

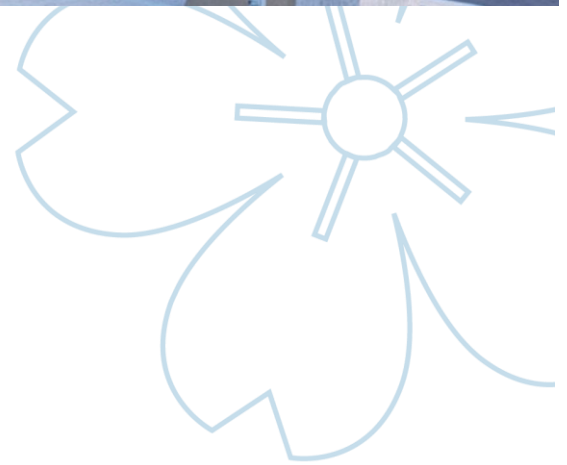
## Bachata en Fukuoka (福岡でバチャータ)

ここチリでは、私は毎日自家用車で通勤していますが、道中はいつもチリのFMラジオ局をつけております。新旧様々な音楽が流れますが、当然その多くはスペイン語で歌われています。時々気に入った曲があると、スマートフォンで曲名や歌手名を調べています(本当に便利になったものです)。スペイン語の曲と言っても、チリの音楽家の曲はむしろ少なく、スペインやメキシコ、コロンビアなど様々なスペイン語圏の曲が親しまれています。

ある日、調子の良いスペイン語の曲が流れていた時、突然「フクオカ」「アリガトウゴザイマス」などの言葉が聞こえて来るではありませんか。「何だ何だ?」と思い調べて見ると、ドミニカ共和国出身のJuan Luis Guerraという男性歌手が歌う、「Bachata en Fukuoka」という曲でした。歌詞を調べて見ると、福岡の女性との思い出を歌ったものでした。この曲は3年程前にリリースされ、日本の新聞にも取り上げられ話題になりました(Juanが福岡公演を行った際の温かいもてなしに感激して書き上げた曲だそうです)。Bachataとはドミニカ発祥のとてもロマンチックなダンス音楽。私はそれまで知りませんでしたが、いまでは好きな音楽ジャンルのひとつです。このような新しい発見もチリ暮らしでのささやかな楽しみです。

LACRCニュースレター第12号では、メインプロジェクトである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の進捗状況を中心に、LACRCの活動をお伝え致します。

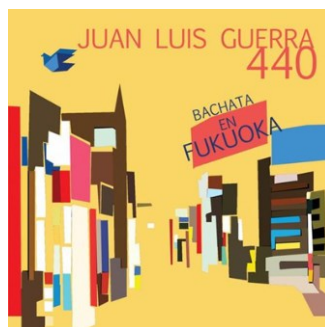
河内 洋 LACRC 人体病理学分野



**LACRC** TMDU IN CHILE  
Latin American Collaborative Research Center  
Santiago de Chile



Juan Luis Guerra



"Bachata en Fukuoka"

## Contents

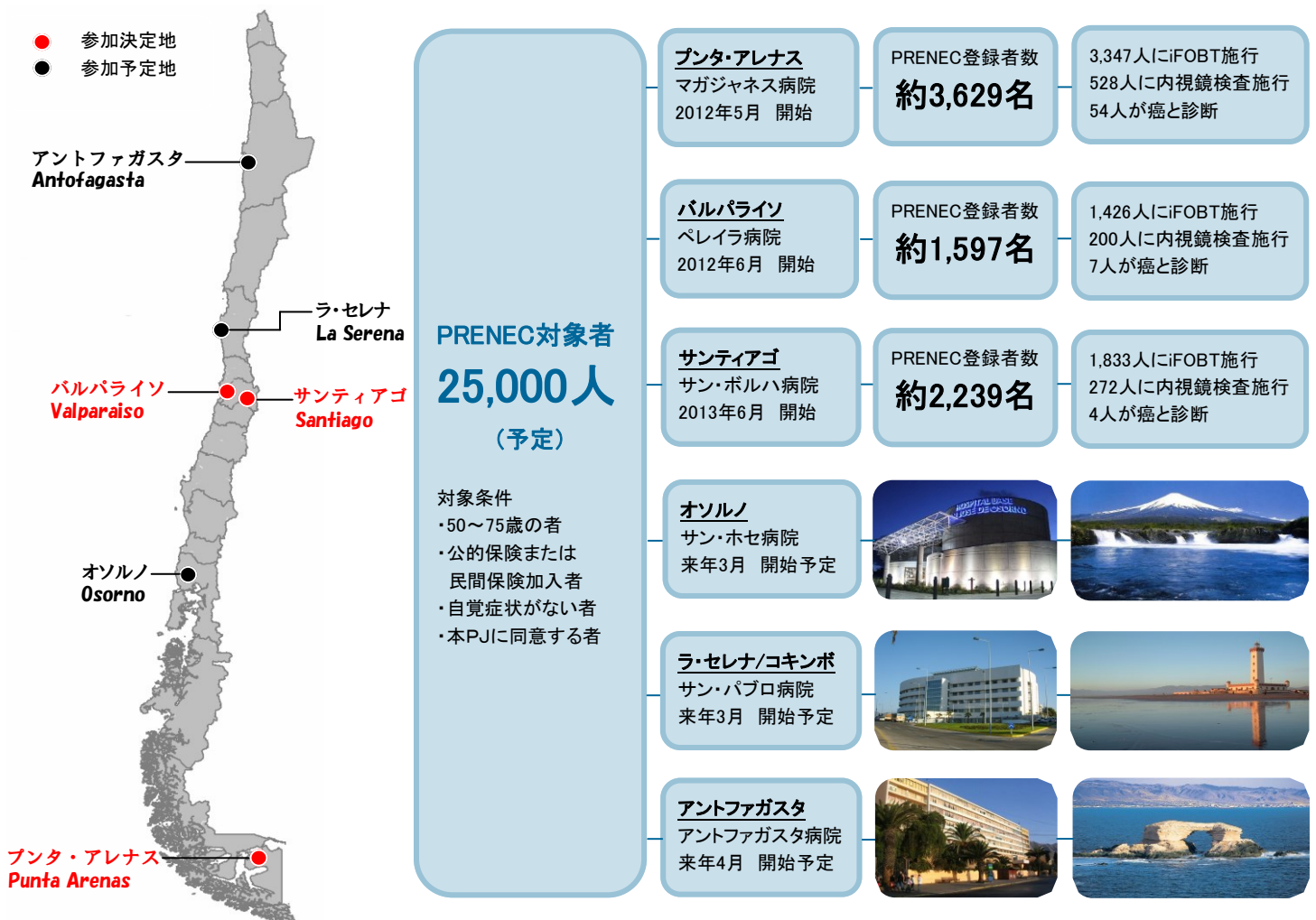
ご挨拶 .....	1
PRENECの進捗状況.....	2
プロジェクトセメスター.....	6
活動報告 .....	7

# PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションであるPRENECの最新情報をご報告いたします。このプロジェクトは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、首都州サンティアゴにおいて10,000人を対象とした免疫学的便潜血反応検査（以下、iFOBT）が計画されています。

## チリでのPRENECの進捗報告

現在のPRENECは、プンタアレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市で進行中です。当初の計画よりも開始が遅れながらも、プンタ・アレナスを中心に着実に成果が得られつつあります。プンタ・アレナスにおいては、現在までに54名の参加者に癌が見つかり、そのうちの8割が早期癌となっています。マガジャネス州は、チリでも大腸癌の発生率が高い地域として知られていましたが、そのことを裏付ける大変興味深い結果となっています。また2014年には新たに3都市でPRENECが始まる見込みです（下図）。



## 第2回PRENEC国際コースを開催

本年9月27日には、第2回PRENEC国際コース(Segundo Curso Internacional PRENEC)が開催され、LACRC河内講師及びロペス医師をはじめとするCLC大腸肛門科のスタッフが講師として出席しました。

本コースは、チリ以外のラテンアメリカ諸国を対象に、PRENECの運営方法やプロトコル紹介、内視鏡や病理等の分野ごとのレクチャーを行うことにより、PRENECへの参加を促進することを目的としています。

今回は富士フィルム・栄研化学の支援の下、ブラジルの4病院から計9名の消化器科・大腸肛門科医師や看護師が参加しました。ブラジルではPRENEC参加を目指してその準備段階であるパイロットプロジェクトがまもなく開始される見込みとなっており、他のラテンアメリカ諸国におけるネットワークがさらに広がることが期待されています。



コース参加者とCLC・TMDUスタッフとの記念撮影



ロペス医師によるプレゼンテーションの様子



プレゼンテーションをする河内講師

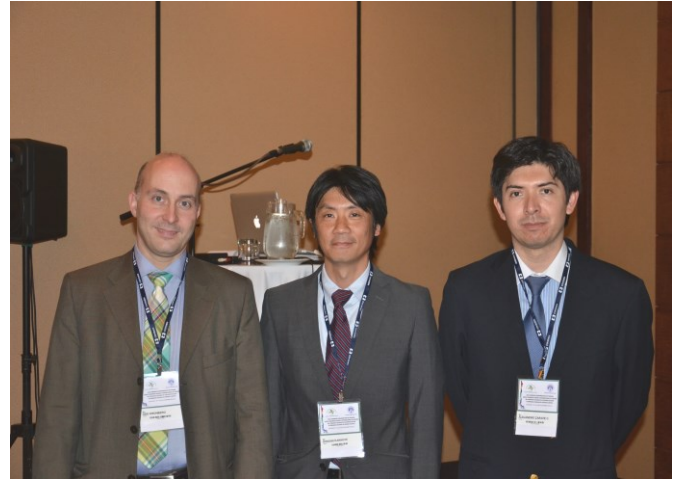


コースの様子

## PRENEC成果の発信が始まる

チリにおける早期大腸癌診断プロジェクト(PRENEC)がスタートしてから約1年半が経過しました。これまでにプンタ・アレナスを中心に6,000名以上が参加し、iFOBT陽性者約1,000名に対し内視鏡が施行されており、粘膜内癌を含めると約60名の癌患者が見つかっています。これは受診者の約1.5%に相当しますが、本邦の大腸癌検診における癌発見率の約10倍に相当するきわめて高いものです。さらに特筆すべきはその約8割が早期であるということです。LACRC及びCLC大腸肛門科では、PRENECの様々な成果を学術論文や学会発表の形で内外に発信する計画を進めています。

2013年11月20日にサンティアゴにて開催されたチリ外科学会及び同月27日にブコンで開催されたチリ消化器病学会において、河内講師がプンタ・アレナスにおけるPRENECの病理学的集計結果報告及び早期癌内視鏡切除検体の日本式取り扱い・診断方法を紹介しました。PRENECにおける癌発見率の高さ、早期癌比率の高さ共に聴衆には大きなインパクトがあったようで、発表後にはPRENECへの新規参加を希望するコメントも寄せられました。また日本式の検体評価方法についても多くの興味寄せられ、日本で培われた技術・経験がより広まることが期待されます。



発表後、学会場にてCLCクロンベルグ医師、サラテ医師らと記念撮影

## マガジャネス病院病理医の研修を実施

PRENECでは、iFOBT及び内視鏡検査が2つの柱となっていますが、発見された病変の病理診断も大変重要です。LACRCには病理医として河内講師が赴任し、日本の進んだ消化管診断学をチリ人病理医に伝えるべく活動しています。しかし、多くのチリ人病理医は欧米式病理診断のトレーニングを受けており、また欧米への留学経験を持つ医師も少なくありません。日本式と欧米式の間には、早期癌に対する考え方が大きく異なることから、欧米式を学んだ病理医にとって、日本式を取り入れることは容易ではありません。

しかし、日々の症例検討会などにおける地道な活動を通し、日本式に興味を示すようになった病理医も徐々に増えています。PRENECの拠点であるプンタアレナス・マガジャネス病院のデルガド医師もその一人で、今回のマンツーマン研修は彼の希望により実現しました。デルガド医師は2013年12月5日、6日の2日間、LACRCオフィスにて河内講師とともに早期大腸病変の顕微鏡観察を行い、病理診断基準のディスカッションを行ったほか、河内講師からいくつかのショートレクチャーも受けました。デルガド医師は、日本における研修にも興味を示しており、将来PRENECを担う病理医となることが期待されます。



研修の様子。左はマガジャネス病院・デルガド医師。

## サン・ボルハ病院での大腸内視鏡トレーニング

チリ国内では大腸内視鏡検査を施行する医師が少なく、大腸癌検診を普及する上での課題の一つとなっております。この状況を改善すべくLACRCは開設当初より保健省、CLCと協議し、PRENEC参加医師育成のための大腸内視鏡トレーニングコース開設を計画して参りました。実際のコース開設は調整に難航し時間を要しましたが、本年10月よりサンティアゴ、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所でようやく稼働し、研修生の受け入れを開始致しました。コースではLACRCの岡田助教が中心となって指導を行い、PRENECの大腸内視鏡検査に参加可能なレベルに達することを目標としております。指導内容は盲腸到達率と到達時間の改善から、腫瘍の発見、治療、また炎症性疾患の診断など多岐に渡り、特に日本が先駆的に取り組み現在も世界のトップである早期腫瘍の発見と内視鏡治療について重点的に指導を行っています。

現在は、ソテロデルリオ病院よりプリオネス医師が本プログラムの第一期生として研修を受講しています。プリオネス医師は2013年のENDOSURでLACRCやCLCの医師の発表を聞き感銘を受け、ご自分で応募され受講に至ったとのこと。向学心が強く、内視鏡挿入や診断の技術にはめきめきと上達が見られ、今後の大腸癌検診の一翼を担うことが期待されます。

今後もLACRCスタッフが積極的な協力と提言を行い、更に高度で効率的なトレーニングプログラムの遂行に励んで参ります。



研修中のプリオネス医師と岡田助教

## フィニス・テラエ大学にて講演

チリにはチリ大学やカトリカ大学の様な長い歴史を持つ大学医学部がありますが、近年では医学部の新設も行われています。サンティアゴにあるフィニス・テラエ大学は1988年に建築系の学科を中心に設立されました。その後2001年に医学部・歯学部をはじめとする医療系学部・学科が設置されました。チリでは基礎・臨床の別を問わず研究活動に従事する医師の割合が非常に低いことが問題視されており、医学生に対し医学研究の重要性を訴えることが必要と考えられています。

2013年11月8日、フィニス・テラエ大学の要請により、河内講師が講演を行いました。講演では、日本における医師のキャリアパスを紹介し、また医師が自ら研究を行うことの重要性を訴えました。本題以外にも、チリの若い学生に日本をより知ってもらえるよい機会と考え、本学やLACRCの紹介、日智友好の歴史のみならず、日本の近代史、工業製品やサブカルチャー、日本食等の紹介も行いました。



講演の様子

# プロジェクトセメスター

## プロジェクトセメスターがスタート！

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を約4ヶ月に渡ってチリの研究施設に派遣しており、LACRCでは彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も10月8日に4名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、1名がチリ大学の研究室に所属しています。

12月2日には、指導者や関係者を集めて第一回進捗ミーティングが開催され、未だ十分な結果が得られていない段階ながらも研究内容の発表やディスカッションが行われました。

学生達は研究生活のみならずチリ人学生との交流等、貴重な時間を過ごしています。2月上旬の帰国まで、無事に、そして充実した日々を過ごしてくれることを願っています。

次号では派遣学生による滞在記をお届けする予定です。



家坂辰弥によるプレゼンテーションの様子



柳平真によるプレゼンテーションの様子



川田大介によるプレゼンテーションの様子



吉岡義朗によるプレゼンテーションの様子

# 活動報告

## エクアドル病理学会に参加

2013年10月16日から18日まで、エクアドル・キト・スイスホテルにおいてエクアドル病理学会が開催されました。

LACRCから河内講師が招聘され、大腸鋸歯状ポリープの病理診断に関する講演を行いました。発表の合間には、パブロ・アルトゥロ・スアレス病院に赴き、進行中の早期大腸癌診断プロジェクト進捗状況確認や、病理診断責任者であるヴァカ医師とのディスカッションを行いました。

キトにおける大腸癌検診プロジェクトはエクアドル保健省も高く評価しており、今後保健省主導で他地域・他公立病院にも展開する計画が進められています。



レセプションにて学会世話人らと



発表後、学会場にて日章旗とともに

### 編集後記

例年12月になると、チリばかりでなく、南米の各地でもクリスマスが盛大に祝われます。また、チリは主にローマ・カトリックの国なので、毎年25日は祝日で、24日も午後からはほとんどの会社や店は仕事を休み、余暇や家庭で家族と過ごすことができます。一方、本学の学生達も10月に到着して以来、徐々にチリ生活にも慣れ、研究や異文化体験を楽しんでいる気がいたします。今後もニュースレターに関して、皆様からご意見・ご質問等がございましたら、お気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点  
Latin American Collaborative Research Center  
Newsletter No. 12, December 2013

[発行日] 2013年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center  
Tokyo Medical & Dental University  
Clínica Las Condes  
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile  
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610  
Email: jurrejola@clc.cl